

対談

# 「保育学」事始(その三)

— 臨床と教育のあわいに —

守 永 英 子

お茶の水女子大学  
附 属 幼 稚 園 保 育 者

野 田 幸 江

愛 育 研 究 所  
臨 床 家

一人の大人が、一人の子どもと出会う。その出会いをかりそめのものとして葬らず、彼と歩みを共にしようとするなら、そこに保育という営みが始まる。このとき、保育者は、子どもに歩幅を揃え、歩調を合わせるために、全力を傾けることを要請されるだろう。同時に、その背には、人生の先輩としての役割をも負わされていて、文化の伝承者としての使命にもこたえねばならないのだ。但し、そこに展開される生活の内容を、一つ一つ取り上げて見るなら、それらの多くは、何気なく見える日常の瑣末事に過ぎない。然し、そのいずれもが、決してゆるがせにはならない厳粛な生活であり、教育の中味なのである。

前回までのお二人の対談は、この経緯を心憎いほどの鮮かさに浮かび上らせてくれている。そして、このことは、実にプロの保育者や臨床家にもみかかわるものではない。何故なら、人間の世界は、疑いもなく大人と子どもによって構成されているのだし、その歴史もまた、両者によって織り成されている。それゆえに、私どもが、人間である限り、子どもとかわりなく生きることは不可能なのであるから。

(本田記)

## 第七課

### 保育の周辺

—子どもをめぐる大人たち—

—前回までのお話し合いで、保育の基盤的なことから、一通り、光が当てられたように思います。そして、根本は、子どもと大人が、いかに生産的な関係を結んでいくかということに尽きるとも言えそうなのですが、考えてみれば、これは、単に幼稚園の先生や、セラピストだけの問題ではないようです。あらゆる大人たち、特に、お母様などにとっても、極めて重要なことのように思われるのですが——。

守永 そうですね。私なんかも、余り忙しくて、自分に別な角度から光を当て直すひまがないと、ずる／＼と深みにはまってしまう。お母さんと子どもを見ていると、本当に、そんな状態ね。考えるいとまもなく、翌日が来てしまっって、どうにも身動きがとれなくなる。

はたから見ると、あゝ、この母と子は、なるべくしてなったんだなって思いますね。お互いがそうしちゃってるのね。

野田 そう。それで、お母さんは気付かないのよね。まあ、子ど

もは、サヨナラって帰って行くわけでもないし、いつもいつも傍にいて、ヤイヤイ言ってるんですけどもね。

守永 そこが難かしいところなのね。

私たちの立場から言えば、そういう子どもを、親の責任と決めつけてもいけないし、その子はその子として受けとめて上げるんだけど、でも、母子の軌道を少し修正して上げると別の面が出てくるんじゃないかなと、思うことも多いのね。

野田 この頃はね、親も変らなければ子どもも変らないということ

とで、セラピーも、パラレルに組んでやるんですよ。私も、お母様を相手にすることがあります。

でも、大人は、変りにくいわ。何十年という歴史を背負ってるんですよ。

「自分で変ろう」という親は変りますね。でも、仲々、自分を見ない人もいるし……。(笑)

——いま、セラピーの場合は、子どもと母親をパラレルにおやりになるということでしたが、保育の場合に、子どもと保育者をパラレルに見て上げるなんてことが出来ないでしょうか。

母親の変るお手伝いをするように、保育者の変るお手伝いのしかたがないのか、否か……。

野田 私の経験から言うと、普通の幼稚園の先生で、障害児を受け入れた途端、とても変る人が多いですね。

つまり、いままでは、自分の思い通りに子どもを動かそうとし、子どもも動いてくれていた。ところが、障害児には、それが通用しない。全く、いままでのやり方が否定されたことに気が付き「さあ、どうしようか」と新しく思える人は、ぐんぐん変っていきますね。

そんな時、「やっぱり、問題児は困る」と排除する気持ちになる人は、変りにくいですね。折角、自分を変えてくれようとしているものを、排除してしまうんですものね。そして、こちらが色々説明しても、本当には受け入れて貰えなくて、「結局障害児は大変よね」ということで終ってしまうみたい。

障害児を受け入れて、積極的にやっていく人は、「自分が変った。変えて貰えた」ということを、はっきり言うことが多いですね。変らないと、生活していけないから……。

守永 障害児ではないいわゆる普通の子どもの保育をしていると、そこに落とし穴があるんでしょうね。健康な子は復元力が強いから保育者のミスを、子どもが修正してくれるのね、そこで、保育者が自覚しないままに、過ぎていってしまふ。

一方から言えば、それが健康児のよいところだけど、子どもの健康さに助けられて、自分を厳しくチェックする機会を持ちにくいよね。子どもの側に、はっきりしたトラブルが起こってこないからと言って、甘んじてはいけないんじゃないかと思えます。もつとも、これは、私自身への自戒ですけどね。

野田 この間、ある親がね、四歳の子どものことを、盗癖がありまして言うの。自分の家では、お金を与えてないのに、近所の子どもの貯金箱から、十円玉なんか持ってきちゃうらしいの。お洗濯のたんびに十円玉が出てくるので、初めはご主人の落としたのでも拾ったのかと思っていたけど、近所の家らしいとわかって、びっくりしたのね。それに、幼稚園では、いつも暴力を振うとか、いろいろ出てきて、すっかり、問題児だと思ひこんだのね。

それから、大騒ぎになって、よその家の上っちゃいけないとか、色々と約束を設けたの。遊びに行きたいというと、「よそのおうちに上らないのね」と念をおす。「うん」「お約束できますね」「うん」というわけで外に出す。でも、子どもは、遊んでいるうちに、よその家に入っちゃうでしょ。帰ってきたとき、「上らなかつたわね」と言うのと「うん。」それが、上

ったとわかると、「どうして嘘をつくの」って怒るの。

盗癖、虚言癖、暴力、とにかく大変な子どもだって言うわけ。四歳の子なのよ。

そこで、私が、「遊びに出て、よそのおうちに全然入らないで遊べると思えますか。一度やってみて、出来なかったら、もう二度と出来ない約束をしないようにしよう、とは思わなかったのかしら」って言ったら、びっくりしてね。「約束自体が悪いなんて、考えても見なかった。守らない方が悪いんだって、思いこんでいた」って言うんです。チラッと見る方向を変えることが出来ないのね。

守永 相手との関係がこじれ出すと、むきになって、相手を変えよう変えようとするのね。そうになると、自分には、光が当たらない。

野田 それに、幼稚園の先生が、「この子は洋服を畳むのが下手だから、ちゃんとしつけてください」とか、いろいろ言うの。そこで、お母様が、にらみつけて目の前でやらせると、その子は、チャンと畳むんですって。幼稚園で言われたことをむきになって、やらせる。その場ではやる。でも、園からまた注意される。「どうして、約束守らないの」って、親は怒る。まさに悪循環で、関係がもっとも変らないのね。

守永 洋服を畳むことだって、技術としては出来るのよね。やろうとしないだけ。

野田 そう。何故、園ではやる気を持たないのか、というアプローチが全然なくて、先生は先生で、家庭におしつけ、母親は約束という形で子どもを責めつける。だから糸がこんがらがらだけなのね。

そんな時、私は、保育者に言いたい。幼稚園で起こったトラブルは、幼稚園で考えてほしい。「こうこうです」って悪いところだけ報告されても、本当に困るでしょ。親は、「園でチャンとやるんですよ」「泣かないでね」とか言うだけね。約束とか、言っただけかすことしか、親は出来ないでしょう。

親のすることも一杯あるけど、園ですることも一杯あるのに、それを、チョイと親にやって貰おう、なんて思っちゃう。そうすると、親は、もっともって親としての保育があるのに、先生から言われたことだけをヤイヤイやるのね。死にもの狂いで。そこで、関係は、益々悪化するってわけ。

守永 保育に大切な素養の一つとして、人間関係に対する臨床的な把握っていうのがあるんじゃないのかな。例えば、いま、この母子に自分がこういうことを言うと、関係がどうなるだろうか、なんてことがわかることが大事ね。保育者として

は、母親に要求したいこともあるわけだけど、「この子は、ここが悪い。あそこも悪い」という報告が、関係をいかに悪化させるかという洞察があれば、やり方もまた工夫されるでしょう。

それに、いま、この子が園でこうなのは、母親だけに還元すべきことなのか、自分の側の問題ではないかって、見直すことも出来なきゃならないし……。

野田 音楽とか美術とか、色んな素養は、徐々に身につけていってもいいのね。人間のことだけは、しっかり学んでおくことが必要ね。これは、保育者養成の問題になるでしょうね。

守永 私自身も、いま、一番必要だと思ってるのは、臨床心理的な理解と技術ね。親と話すときも、「どうすればいいか」って言うことが言えなきゃ、つい、報告だけで終わってしまうでしょう。

野田 この間、あるお母さんに奥の手を教えたの。保健婦さんをしている人の子どもなんだけど、幼稚園で問題が多いって言われたのね。しかも、「お母さんが働いてるせいじゃないか」って。甘えるとか、乱暴するとか、そんなことをみんな、母親が働いていることと結びつけるのね。そこで、その人は、すっかり悩んじゃったわけ。

だからね、こう言ったの。「先生に、『家で、一生けんめいやってみるから、一つだけ、大事なことを教えてください。毎日毎日やってみますから』って、頼みなさい」って。

そしたら、先生が、「抱いて上げて下さい」って言ったんですって。そこで、せっせと抱いてみたけど、よくならない。私は、また、こう入れちえしたの。「先生の所に行って、『毎日々々抱いていきますけど、どうですかよくなりましたか?』って聞いてもらんなさい」って。

そこで、先生に、せっせと「どうですか? どうですか?」って聞いたのね。そしたら、先生が、「お母さん、そんなに焦っちゃダメですよ。長い目で見ましようね」って言ったんですって。(大笑)

先生自身が、近視眼的に「アレも悪い、コレも悪い」とイライラしていたわけでしょう。ところが、母親が、先生の指示に忠実に従って、せっせとやっている、そして、毎日々々、効果を確かめに来る。そこで、先生も気付いたのね。子どもって、もっと、ゆっくり見て上げるべきだってことに、それと、これは、母親だけの問題じゃなくて、園でも努力しなきゃならないことじゃないかって。その後、先生も、目をかけてくれたらしくて、すごくおだやかになったみたい。幼稚園

の先生は、時として、気に入らないところを幾つか見つけると、それを親に報告して、何とかしなさいと命令して、役目が終わったみたいに思っちゃうでしょ。でも、その人みたいに、「どうでしょう変りましたか？」って催促されると、「ああ、母親は母親で頑張ってるから、私も、園のことは園で頑張らなきゃ」ってことに気付くのね。

先生にイヤなことを言われそうなので、なるべく近づかないように逃げ廻る。先生は、是非ともつかまえて、あのことだけは報告しなきゃ、って思う。それで悪循環が起こるのね。逃げる→つかまえてイヤなことを言う→くさって子どもに当る→子どもは、ますます不安定になる。ってわけ。お互いやっていかなきゃならないことなのよね。親と先生と、両方が積極的に、子どもに対してプラスの関心を持つてば、子どもってすごく変わるものよ。

守永 逃げ歩かないで、「先生を上手く利用せよ」ってわけね。それは、人と人との関係に共通でしょう。

野田 本当よ。障害児のお母さんでも、近所隣の人の悪口を言わない人の子どもは、大丈夫ね。普通学級でも、大い、上手くいってるの。

その逆で、悪口や愚痴ばかり言っている人の場合、子ども

が、仲々上手くいかないのね。

つまり、どんなところへ行ってもいい人間関係を作る人は、子どもを新しい集団に入れたら、そこで、先生や他の父母と、必要な人間関係を作っちゃうのね。

しかも、「皆さんがいい方だから」と思いながら、感謝している。そこで、多少のことは、いやがらず努力する。すると子どもも、安定した場を獲得しやすいのね。

逆は、仲々上手くいかない。子どもの生活しやすい場を作るための基盤が出来なくて、子どもや先生にだけ要求したり、先生も、親に要求や不満ばかり抱いていたら、子どもはやっていけないでしょう。

守永 本当ねえ。悪いのは周囲の人じゃなくて、いい人間関係を作れない自分の責任なのね。

野田 私もはじめは、そのへんがよくわからなくてね。「この人は、いい人々に囲まれて運がよかった」とか、この人は、気の毒だな」とか思ってたの。心底、そう思ってたのよ。

守永 あなたって、心底から人を受け入れるのね。(笑)

野田 でも、やっと気付いたのよ。どこに引越しても、「悪い人ばかりに囲まれる」のは、結局、その人のとらえ方なんじゃないかって。

守永 何でも、マイナスにしかとらえない。外罰的に、他者に責  
任を向けてしまふ、ってわけね。

野田 そう、自分は一步も出ない。ほんの一部でも、自分を変え  
てみる事が出来ないのね。

それにしても、「自分が変わる」ってことが、本当に大切な  
んだって、しみじみ思うの。

守永 私も含めて、「困った子ども、困った親」に悩んでいるつ  
もりの保育者は、反省すべきね。「困った先生」なんじゃな  
いか、って。

——お話をうかがっていると、臨床体験の中から、人間の  
生き方の基本みたいなものが、洞察されていくわけです  
ね。子どもの臨床というのが、そういう意味で、根源的  
な人と人の出会いの場だということでしょうか。

ところで、すべての臨床家が、そういう洞察に到達す  
るのですか。

野田 さあねえ。他の人のことはわからないから……。

守永 周囲のお仲間の中でも、とてもよくわかり合える人と、余  
り話の通じない人がいるんでしょう。

野田 そう感じることもあるわ。でも、臨床家ってのは、子ども  
を規範に合わせようとせず、あるがままを認めるという立場

に立つてしょ。だから、人間の問題の基本的なところが、見  
えやすいことは確かね。「こうしようこうしよう」って、自  
分の決めた型を追っかけてるんじゃないから。

障害児なんていったって、その人として育ってきた生活の  
基盤があり、人となりがあって、そのどこか一寸したところ  
が、どこかでゆがんでるだけでしょ。それを直して上げるの  
に、その人の中から何かを借りるわけよね。その人の育つて  
きたものの中から、或いはその人の育つ方の中から、何かを  
借りて、ゆがみの部分の補い方を工夫するわけよね。そこ  
で、どうしても、人を見つめると言うか、見据えると言  
うか、そんなことに一生けんめいになるんでしょうね。

守永 保育だって、本当は、そうですね。それが基盤ですよ  
ね。

——やはり、子どもをみつめることは人間をみつめること  
のようですね。「保育学事始」は、「人間学事始」でもあ  
る、ということでしょうか。

どうも、いろいろとありがとうございました。

了了

記録 皆川美恵子  
文責 本田 和子